阿部昭
父と子の連作

阿部昭
父と子の連作

福武書店

© Akira Abe.
Printed in Japan,
1988

阿部昭（あべ・あきら）
一九三四年、広島市に生まれる。五九年、東京大学文学部仏文科卒業。七一年までTBSに勤務。六二年、処女作「子供部屋」を発表。近著に『短編小説礼讃』『阿部昭18の短篇』『エッセーの楽しみ』『挽歌と記録』など。

父と子の連作

一九八八年十一月十日第一刷印刷
一九八八年十一月十五日第一刷発行

著者　阿部昭

発行者　福武總一郎

発行所　株式会社福武書店
東京都千代田区九段南二-二三-二八
郵便番号　一〇二
電話　東京（〇三）二三〇-二一三一
振替　東京六-一〇五〇九七

印刷　大日本印刷株式会社
平版　株式会社栗田印刷
製本　加藤製本株式会社
定価　九八〇円

乱丁・落丁本は、送料小社負担にてお取替えいたします。
ISBN4-8288-2284-4　C0093　NDC914　210　206p

目次

未成年　5
大いなる日　47
鵠沼西海岸　67
司令の休暇　85
あとがき　197
発表年月　200

装丁　小山晃一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

父と子の連作

未

成

年

1

これこそ「士族の商法」というものなんだろうと僕は思っていた。

下宿人を置いたらよけい生活が苦しくなった。そんな馬鹿な話はないのだ。考えてみると、それは一つにはおふくろがやりくりが下手なのと、ひとつにはへんな料理自慢から、家の者の食事の質をおとしてまで下宿人たちに贅沢をさせている。それで月末になると、身内はおろか下宿人をやしなうのにきゅうきゅうとするありさまなのだ。

では、せめてもう少し部屋代を上げさしてもらったらどうか。それを僕がいうと、おふくろはぞっとしたような顔をする。値上げを申し出たりしたら連中が憤然としていっせいに出て行ってしまう、と思いこんでいるのである。何のために下宿をはじめたのかわからない。

空いている部屋があるのだから貸せばいい、とかんたんに僕もおふくろも考えていた。僕は勉強机を持って応接間から物置がわりの三畳の部屋にうつる。おやじとおふくろはさしあたって必要な家財道具だけを子供部屋にはこびこんでたてこもる。それでまず、三部屋は貸せる。下宿人は原則として賄つきで、だから部屋代だけはまるまる浮く、とこう考えた。

ところが、やってみるとそんなあまいものではなかったのだ。経済の面以外にも、おもしろくないことがいろいろと出てきたのだ。

下宿人たちが入った一番あとから風呂に入りに行く。すると、湯殿の足拭きはもう彼等のからだのしずくでびしょ濡れだった。便所へ行けば、草履には誰のかわからない他人の足のぬくもりがあった。玄関にはいつも、僕やおやじの底に穴のあいたボロ靴と並んで、下宿人さまたちの立派な靴が光っていた。おふくろが毎朝ポーチにしゃがんで、気ちがいみたいに磨きたてるから。

自分の家なのに自分の家でなくなっている。しかし、だからといって彼等を憎むというのは身勝手な話なのだ。もともとこの家も敷地ぜんたいもとっくに抵当に入っていた。おやじがむこう見ずにやってしまった借金もかさんでいた。大した屋敷でもないのに、僕はずいぶん

感傷的になっていた。いずれ、僕がおやじやおふくろとこの家を出て行くことがあるだろうか？　あの桜の園の若いむすめみたいに、さようなら、お家！　さようなら、旧い生活！　といいながら。

わけても、おやじはあわれだった。おやじはさいしょ、無能をきめこんだ下宿屋の亭主らしく、つとめて下宿人たちに愛想よくふるまおうとして、あっけなく失敗していた。食堂に出てきてなんとなく彼等に話しかけたりしているうちに、やっぱり出る幕じゃないと分ったのだ。おやじの前歴をきくと、若い連中はたいがい、軍人か！　という興ざめな顔をした。「軍人さん」というのはいいほうで、わざわざ「閣下！」なんて呼ぶのもいたからな。

彼等にしてみれば、めしの世話をしてくれる下宿のおかみさんにだけ用があるので、その亭主なんていうのはいかにもみっともない存在だったにちがいない。だから、おやじはなるたけ目ざわりにならないようにしていた。洗面所に立つ時だって、彼等と廊下で出くわさないように、それとなくタイミングに気をつけているみたいだった。

僕がいるのは昔の女中部屋である。ここで寝起きしていたセツや、とか、キクや、とかいった不幸なむすめたちの顔もまだおぼろげながらおぼえているような気がする。この家の中ではいちばん暗い北のすみにあって、朝のうちほんのわずかに陽があたるらしい。というのは僕は、たいてい午後おそくまで寝ているから。押入れをあけると、便所のにおいがする。便所と背中合せになっているのだ。

この部屋にたてこもって、僕は寝てもさめても、守銭奴みたいに、金、金、……といっていたわけである。じっさい、金がなかった。キザな言い方をすると、小ゼニに不自由していた。電車賃にもことかいた。といって、どうやってその金をつくるかということにかけてはさっぱりだったのだ。具体的な方法というやつはかいもく浮んでこなかった。学生の僕に思いつくことといったら、現にいくつもやっている家庭教師のほかには、入学の時おふくろと東京へ買いに行った学生服の上着や苦労して月賦で手に入れたラジオを質屋に持って行くこと、本を一冊また一冊と売ること、ぐらいのものだった。そんなことはとっくにしつくしていた。

あんまりチエがなさすぎるなと思いながら、僕はがら空きになった本箱の前に突っ立って、残っている数冊の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

本の背文字をじっとながめたりした。まさか売ろうというんじゃないだろうね、最後までがんばったおれたちを、とそれらの本がいっているような気がした。僕は僕で、おまえたちをすこし大事にしすぎたかな、などといってやったりした。まえに本がぎっしり並べてあった箇所にもあつい埃がいちめんにつもっていた。どんな本があったかも思い出せなかった。もう一度手に入れたいとも思わなかった。愛していた本を売ってしまったことで、僕は自分の心がとりかえしようもないくらい荒廃してしまったような気がしていた。血を売ったあとみたいに、すさんだ、捨鉢な放心におちいっていたのだ。

ついこないだ、僕は炎天の下を歩いていて金をひろった。そんなことはあとにもさきにもなかった。百円から一円までのバラ銭が、人通りのすくない住宅区の道路に二、三十メートルほどにわたって、点々と、撒き餌のように落ちていたのだ。僕は眼をこすりたいような気持で、一枚また一枚と拾ってあるいた。わざとでないとしたら、ずいぶん念の入った落し方だなあ、と僕は思った。あれこれ想像して、もしかしたら、これは子供がおとしたんじゃないかという気がした。母親に使いにやらされた男の児が猛烈に自転車をこいでとばしながら、勘定の分だけきっちり渡されたのを穴のあいた半ズボンのポケットからでもばらまいて行ったのかもしれない。そして、一円とか五円とかいうのはその子の駄賃だったのかもしれないのだ。

ああ、それなら、その金をもっと有益なことに使えばよかった。僕はふらふらと町のソバ屋に入って、天丼をたべてしまったのである。

満腹感と同時に、コジキをした！　という唖然とした気分におそわれて、僕はわらい出しそうになった。何年かまえ、まだおやじもおふくろも部屋を貸すことは思いつかずに、売り食いのドン底生活をしていた時分、僕の飼っていた猫が近所の台所からくわえてきた見事なシャケの切り身を、あくる日弁当のおかずに入れて学校へ持って行ったことなども思い出された。あの頃とちっとも変っていやしない。

猫のシャケを人間がうばってたべる！　そのこともおかしいことには違いなかったが、そんなにしてまでも人間が生きるということのほうがもっとおかしいではないか。

じつをいうと、僕はその天丼に味をしめたのだ。以後、ちょっと気をつけて道を歩くようになった。ふくら

んだ革の財布をひろう！　そんなことを考えている自分にふと気がつく。すると、僕は顔が赤くなるような気がした。現実にキョロキョロと地面に眼をやりながら歩いていたのである。それがもう癖みたいになってしまっているのかしら。

――金がなければ、人間、生きてゆくことができませんからね。……

てれかくしに、僕は歩きながらわざわざ口に出して唱えてみたりした。そうでもして眠りこけている自分を抓ってやらないことには、この僕というやつはいっこうにやる気をおこさないのだ。

あつい日がつづいている。浜のほうからは、ひっきりなしに海水浴場のざわめきが大空の風にのってながれてくる。風の吹きかたしだいではスピーカーの流行歌の文句がいちいちはっきり聞きとれるくらいだった。そのうちの何曲かを僕はいつのまにか覚えていて、ふと口ずさんでいたりするのだ。

日中は一歩でも外へ出たら太陽にうちのめされそうな気がした。まる一日僕は死んだように横になっていた。すぐそこに海があるのに、なぜか海水浴というやつは子供の時分の思い出みたいだった。

廊下をへだてたむかいの座敷には、小室という若いデザイナーがいた。それがまた何か新しい品物を買いこんできて、おふくろに見せびらかしているのが聞えた。今度はスポンジのなんとかフォームというマットレスらしい。それを小室はけさから部屋のまんなかにひろげて、パンツ一枚で大の字に寝そべっていた。

「ああ、いい気持、いい気持、……」

なんとなく猥せつな声の出し方だった。

食事の知らせに行ったおふくろに、寝ている小室がわざとそんなことをいっているのである。

「何と申しますんです、それは？」

新製品にうといおふくろが廊下に膝をついたままきくと、

「これは、おばさん、スポンジというもんですワ。」

そういって小室はためして見せたらしかった。

「ほらね、ふわふわして、すべすべして、ご婦人のからだみたいで、いい気持、……」

としとったおふくろはだまっていた。若い者のそんな冗談にうまくとりあうことを知らないので、なんだか一層まじめな顔つきになったおふくろの顔が見えるようだ

った。
「お食事はどちらでなさいます？」
おふくろはお伺いを立てていた。
「持ってきて下さい。」
小室は寝たまま横柄にこたえた。
行きます、という返事があれば食堂でたべるということであり、持ってきて下さいといわれればおふくろが部屋まで膳をはこんでやるのである。しばらくしてまた下げに行く。
なにもそうまでしてやる必要はない、と僕は思うのだが、おふくろにしてみれば小室は上客なのだろう。彼はこの家ではいちばんいい座敷を占領していた。床の間にはいまでは大きな画架や映画女優の似顔絵を描きかけたキャンバスなどが押しこんであった。畳の上には油絵具やポスターカラーのびんが散らばってあちこちをよごしていた。
デザイナーという商売は金まわりがいいらしいのだ。新しがりやの小室はやたらといろんなものを買いこんで、ごたごたと部屋に並べていた。飽きるとおふくろにくれてやったりしていた。
彼のおしゃれもどこかそれに似ていた。雨の日でもサングラスをかける。花札の絵みたいなすっとんきょうな柄のシャツを着る。かとおもうと、底の厚みが五センチもあるようなラバソールをはいて出て行った。どことなくインチキくさい、ヨタモノじみたにおいが小室自身にも小室の部屋にもあった。
——成金め。
僕にはいくらかうらやむ気持があったかもしれない。見ろ、このおれが女中部屋に逼塞して、金、金、……といい暮しているのに、あいつは裸でいる時も金のにおいをぷんぷんさせているぞ。
小室はいいからだをしていた。裸になると濃い胸毛がじまんらしかった。ぴかぴかするペンダントを頸につるしたりしていた。僕は小室の肉体にもおされるように感じていたのだ。僕といくつも年が違わないのに、もう何人もの女を知っているらしい小室のからだ。
「きょうは、おばさん、晩めしはいらないや。デイトだから。」
そういって出て行った日は帰りがおそかった。帰ってこない晩もあった。
その小室のとなりには、佐久間というこの町の税務署員がいた。佐久間は毎晩おそく寝に帰るだけでほとんど

家にはいなかった。
一年まえの春、僕が大学の試験をうけに東京へかよったとき、三日間腕時計をかしてくれたのは佐久間だ。前の晩、食堂でたまたまおそい夕めしが税務署員といっしょだった。僕はまるまると肥えた佐久間が、めしを食う間もさかんに鼻で息をするのがいやで、ふだんから同席をきらっていたのだ。彼が太いのどで生タマゴをまるのみにするところなどは見ていられなかった。ゼイムショ、ゼイムショ、と僕はかげではいっていた。
「いよいよ、あしたですねえ。」
佐久間は僕の受験のことをおふくろから聞いて知っていたらしい。それから、だしぬけにいった。
「君、腕時計、持ってないでしょう?」
僕はぎくっとして、ええ、といった。
「持ってなかったら、僕のを持って行きますか。試験場で、ないと不便でしょう。」
佐久間はそういって箸をおくと、自分の腕から金色のバンドのついた時計をはずして、僕のまえに置いた。
僕は時計のことなんか全然考えていなかったのだ。
「じゃあ、遠慮なく貸していただけば? 三日間だけ。」
どうしようか迷っている僕にかわって、おふくろが借りるようにしてしまっていた。
「はめてごらんよ。バンドの寸法が合うかしら。僕は君より腕が太そうだから。」
僕ははめてみて、なるほどな、と思った。ほかのことを考えていた。質種にしようにもこの腕時計というやつを持ったことがなかったんだ、などと。
税務署員の時計をはめて僕は試験場へかよったわけだった。佐久間は三日間、時計なしで勤めに出ていた。合格の発表があったあとで、僕はもういちど彼にお礼をいった。すると佐久間は今度は入学祝いにバーゲンの十冊いくらの大学ノートを二十冊くれた。
そういうことがみんな、僕にはなんだかせつなかった。時計を持っていないことや、おふくろが僕の身なりをととのえる余裕がないことがなさけないというより、他人の好意がいちいち僕の心を傷つける。そのことのほうが悲しかったのだ。
とにかく僕が大学をうかったというのは下宿人たちにもニュースだった。
廊下の西のはしの和室で自炊している中丸という無職の五十男までが、僕をつかまえて、
「大学ー 大学とおっしゃると、兄さん、そりゃあ最高

学府じゃござんせんかー」
とおどろいてみせたりした。
なにかというと中丸は、この最高学府という合の手を入れる。自分はむかしの「尋常」しか出ていない、だもんで学問のあるお方にはまるっきり頭が上らない、などというのだ。これは僕にちょっぴり嘲弄みたいに聞えないこともなかった。こんなすってんてんの生活をしていながら最高学府もないもんだ。それもなまっちろい文学部ときては！　さっさと息子を職にでもつけたらどうなんだろう。小室だって佐久間だってみんなそう思っていたにちがいない。
連中の期待にこたえるみたいに、まもなく僕は家でぶらぶらしはじめた。おふくろは僕の顔を見れば床屋へ行くことと、「眼の調子を変える」ことばかりいっていた。僕の眼が夜はあいていて昼間はつぶることをいうのだ。洗いざらしのワイシャツの腋の下から背中にかけてを風でふくらませて、病みあがりみたいな髪の毛をして町を歩いている僕を、おふくろは世間に恥じていた。掏摸みたいだ、なんていっていた。たしかに僕は、パチンコ屋の店先に朝いちばんからたむろして、タマをはじくでもなく、人を待っているわけでもなく、ゴムの草履ばきでむやみに寒そうに口笛を吹いていたりする、あの顔色の悪い連中にいちばんよく似ていた。
そんなわけで、とにかく、しょっちゅう家にいるのは僕と無職の中丸だった。
その中丸がおふくろと立話をしている恰好を見ると、僕は小説なんかでしかぶつかったことがない、人生の敗残者、という言葉をおもい出す。
「……いやですよ。あたしじゃござんせんよ、そんなこと。困りますよ。いやじゃありませんか、そんな、お恥ずかしい、……」
そんな調子で、のらりくらりと体をかわして、相手をぶつ手ぶりをして、合い間には口に手をあててホホホと笑ってみせる。中丸の「ございません」は「ござンせん」と聞える。ときには「あなたさま」といったりする。
中丸は部屋の下見にきたときは、なかなかりゅうとした身なりの紳士だった。品もわるくなし、みえっぱりなおふくろの気に入った。
あくる日、中丸はトラック一杯分の家財道具をつんで越してきた。持物の多いことで僕らはまずおどろいた。鍋カマはもちろん、すり鉢やチリ取まで持っていた。
中丸が来たすぐの日から、僕もおふくろも、これは少

しまともでない、と思いはじめたのだ。ことわればよかった、とおふくろはいいだした。

中丸がふだん着に菜っ葉ズボンの裾をしぼったような手製のモンペをはく。これは予想外だった。炊事や掃除をはじめるときは、その上に米屋みたいな前だれをして、あたまに手拭をかぶる。その恰好を見るたんびに、おふくろが僕やおやじにこぼすわけだった。

「あの人があんな恰好でうろうろしていると、いまにほかの人がいやがって出て行きますよ。ご近所にだって外聞のわるい！」

僕もすこしは変だと思った。だが当人はなんら害のないおとなしそうな人物だし、だいいち下宿人を置くまでにおちぶれていながら、外聞もくそもないような気がした。どんな人間だっていいのだ。入ってくれる人があれば結構なんじゃないか。

それに、中丸はたのみもしないのに、朝と夕方の二回、庭まわりと往来の門のあたりを竹ボウキで掃くのを日課にしはじめたから、その恰好はたちまち近所の目にふれることになった。おかげで僕らはいつも中丸のホウキの目がきれいについた地面を踏んでいた。

おふくろはずいぶん長い間、中丸のモンペや頭にかぶる手拭のことを憎んでいた。中丸があんまり主婦みたいによくはたらくので、おふくろはおびやかされるように感じたのじゃないかと僕は思うのだ。

その同じモンペばきで中丸は買物籠をさげて晩のおかずを買いに町へ出て行くのである。まずいことに、その時間はおふくろがその日の買い出しに出かける時刻と大体一致していた。おふくろは、買物籠に長ネギを二、三本入れて、むこうからせかせかと小股でやってくる中丸と出くわしたり、どうかすると、おなじ八百屋で、中丸が葉ぶりのよさそうなホウレン草や一と山いくらの傷んだリンゴをしきりに選っているのを見かけたりすることになるのだった。

しかし、世間体がわるいからといって、モンペをはくな、とはいえない。買物籠なんかさげるな、という権利は下宿の主婦にはない。いいじゃないか、どんな生き方をしたって、と僕は思うのだ。どんな恰好をしようと、何といわれようと、人は生きる。げんにおやじだって、……

僕はおやじの立場を考えると、いささかむきにならずにはいられない。ふるいたつような気持にならないではおれない。当然のことながら、これまでにこの家に出入

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com